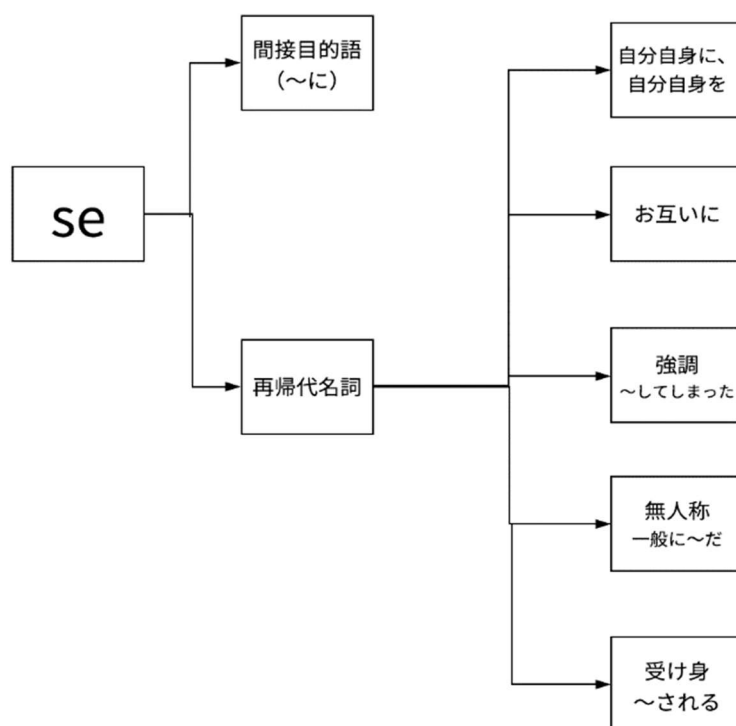


Se の識別

Electroencefalografista ‘脳波測定士（2019 年現在、スペイン語で最も長い単語だそう
な）’ や、Otorinolarinología ‘耳鼻咽喉科’ といった長い単語を見ると、「難しいな」と思
う人は多いのではないのでしょうか。確かに、綴りを覚えるのは難しいかもしれません。し
かし、これらの単語には一つの意味しかないので、字面さえ覚えてしまえば使いこなすこ
とはそう難しいことではありません。人間の言語において、使いこなすのが難しい語とい
うのは、往々にして短い単語だったりします。そうした単語ほど、多くの意味・用法を持
っていたりするので、全貌を把握することが難しいわけです。

そんなわけで、今回は、みんな苦手な se の識別です。Se という語はスペイン語で 9 番
目によく使う語なので、その全貌の把握は必須です。Se の用法は大体以下のようにまとめ
られます。



Se の用法の大まかな全貌

1. 間接目的語の se (彼/彼女/それ/彼ら/彼女ら/それらに)

Se lo doy. 「**彼に それを** あげる」のように、同じ文の中で三人称の間接目的語と直接目的語が同時に用いられる際に間接目的語の le/les が se になるという現象があります（上記の文は Le lo doy と書くとアウト）。このように、我々が見かける se は**間接目的語の代名詞が変形したもの**である可能性があります。

この se はあくまでも、le/les が lo 等の直接目的語の代名詞と同じ文で使われる際に変形

したものです。よって、この se は必然的に SVOO という文型をとる動詞とセットで用いられることになります。SVOO 文型を取る動詞の典型例として dar や regalar 等の譲渡を表す動詞、decir, contar のような発話行為を表す動詞、enseñar, mostrar のような英語の show にあたる動詞などがあります。**逆に言えば、このテの動詞と一緒に使われている se は間接目的語の可能性が高いということです。**

訳しましょう

君はそれを (el libro) 彼にあげた。

私たちは彼女にそのことを話した。

私は彼らにそれを見せてあげたい。

2. 再帰の se

英語の myself, yourself など、-self とつく代名詞のことを再帰代名詞といいます。そして、三人称単数および複数の再帰代名詞は se という形をしています。表に示した通り、つきつめればスペイン語の se とは、前節で紹介した間接目的語の se か再帰代名詞のどちらかということになります。「se は究極的には二択なのになんでこんなに難しいんや」とお思いの向きもあるでしょう。それはなぜかという、再帰の se には英語の -self とは比べ物にならないくらい多くの用法があるからです。スペイン語の再帰代名詞の se の用法を整理しておきましょう。

2.1. 「自分自身を、自分自身に」の se

最も基本的な用法です。「主語が自分自身に対して何かしらをする」ということです。以下のケースなんかはわかりやすいんじゃないでしょうか。ちょっと例が物騒で申し訳ないのですが……

Marilyn Monroe ha muerto. Se mató.
Marilyn Monroe is dead. She killed herself.

日本語では「X は X 自身に～する」みたいなことはほぼ言わないわけですが、スペイン語ではこういうものの言い方を多用、乱発します。このギャップが、我々が se を見てギョッとする理由の一つだと思います。**スペイン語は「X は X 自身に～する」という言い方をやたら使う言語**ということを前提としてしっかり念頭に置いておくといいでしょう。

José se levanta a las nueve.
ホセは九時に彼自身を起こす→彼は九時に起きる

Cof-kun se puso el sombrero.

こふ君は彼自身に帽子を身に着けさせた→こふ君は帽子を身に着けた。

Este chico se llama pin-chan.

この子は彼自身をぴんちゃんと呼ぶ→彼の名前はぴんちゃん。

スペイン語がこの言い方をよく使うのにはいくつかの理由があります。まず、**スペイン語には自動詞の数がやたら少ない**という事実があります。つまり、「起こす」という意味の言葉はあるのに、「起きる」という動詞が存在しないのがスペイン語なんです。なので、私は九時に起きる、I wake up at 9:00 ということをスペイン語で表現するには「私は私自身を九時に起こす」みたいな言い方を**せざるをえない**のです。

次に、**スペイン語は、主語はバンバン省略するのに、目的語の省略には極めて厳しい**言語という事実があります。逆に日本語は目的語を省略しまくる言語です。例えば↓のような場面を表現すると、先に挙げた Cof-kun se puso el sombrero. となります。

この文は以下のような発想で作られています。

- ① 主語は？ > Cof-kun
- ② 動詞は？ > poner ‘身に着ける’
- ③ 直接目的語は？ > el sombrero ‘帽子’
- ④ 間接目的語（「帽子を身に着ける」と言うからには「身に着けさせられる」奴が必ずいるはずや。スペイン語はそういう目的語っぽいやつらをちゃんと省略せずに書かなあかんのや。身に着けさせられているのは）？ > Cof-kun、主語と被ってるので **se**

以上のパーツを文法のルールに違反しないように並べると Cof-kun se puso el sombrero. となります。ポイントはスペイン語では 4 のような、動作の対象を几帳面に表現するという点です。これがスペイン語は目的語の省略に厳しいということです。

訳しましょう

彼は鏡で自分を見る。（鏡は espejo. 動詞は ver を）

彼らはソファに座った。（動詞は sentar ソファは sofá）

彼女はコートを脱いだ（quitar という動詞が使えます。コートは abrigo）

2.2. 「お互いに」の se

これはまあ、「自分自身に」の変種です。以下の例を見て下さい。

Ellos se escriben.

彼らは彼ら自身に手紙を書く＞彼らはお互いに手紙を書きあう。

このように、主語が複数の時、se はこの「お互いに」の意味で用いられている可能性があります。Se の用法の中で最も見分けるのが容易だと個人的には思っています。

訳しましょう

ロミオとジュリエットは燃えるように (ardientemente) 愛し合っていたが、彼らの親は憎みあっていた (odiar という動詞を使いましょう)。

2.3. 「～してしまう」強調の se

Se が難しくなるのはこの辺りからです。例えばこの用法はもはや「自分自身に」という再帰本来の意味合いが全くないです。以下のような例が強調の se の典型例です。

¡Nos vamos de aquí!

さっさと行っちゃまおうぜ！

Ella se fue de aquí.

彼女はここから立ち去ってしまった。

Se comió la paella.

彼はパエリアを平らげた/He ate **up** the paella.

José se murió ayer.

ホセは昨日死んでしまった/José died yesterday (英語でこのニュアンスは出しづらい)。

Cuando tu me miras se me sube el corazón. (Bailando という大ヒット曲の一節)

君に見られると心臓が登ってきちゃう。

と、こんな感じで、日本語の「～してしまう」のような、強調のニュアンスを出す機能が se にはあります。日本語母語話者としてはわりとわかりやすいんじゃないでしょうか。英語にはこのニュアンスを出すのに特化した表現手段がほぼないため、英語母語話者的にはかなり難しいようです。我々が冠詞の概念を理解しづらいのと同じで。

ところが、この強調の se は日本語の「～してしまった」ほど無制限に使えるわけではないのです。例えば、日本語では「到着してしまった」というのは自然な表現ですが、スペイン語で Se llegó. というのは奇妙です。「泳いじゃった」という日本語はまあ、ありでしょうが、Se nadó. というのもかなり厳しい、などなど。強調の se はかなりよく見る表現ですが、同時にかなり縛りの多い表現でもあります。Comer は例文に挙げた通り強調の Se

とかなり相性がいい動詞ですが、Se comió la paella. とは言えても、Se comió la paella en parte ‘彼はパエリアを部分的に食べてしまった’とは言えません。日本語では言えそうですが。

強調の se というのは正確に言えば、動作が完了した結果、主語ないし目的語になんらかの変化が起きたことを強調する表現です。 従って、「部分的に」とか「途中まで」のような表現と極端に食べ合わせがわるいのです。逆に言えば、強調の se がくつつく動詞はかなり限られています。**Comer, beber, consumir** そして **leer** や **ver** など、広い意味での消費を表す動詞や、**ir, morir** など、広い意味での消滅を表す動詞とくつつきやすいです。上記のタイプの動詞に se がついていた場合、強調の se である可能性を検討してみましょう。

訳しましょう

彼は薬を一瓶飲んでしまい (una botella de pastillas/動詞は tomar)、死んでしまった。

2.4. 「一般的に～である」無人称の se

再帰の se は一般論を表すのにも使えます。文法の教科書では「無人称の se」という名前で教わるのではないのでしょうか。

Se come bien en este restaurante.

このレストランでは美味しいものを食べられる。

この se についてもわりと識別は容易です。主語が明示されておらず、文脈的に一般論が来そうな流れで出てくる se はこの一般論の se の可能性が高いです。

自分で使う際も、主語を言わない・書かない、動詞はかならず三人称単数にするという二点にだけ注意すればよいだけなので、使いやすいでしょう。

訳しましょう

バティスタはお薬を飲んでしまった (tomarse una pastilla) ものと考えられている。

2.5. 受け身の se

スペイン語では英語と同様、ser/estar + 過去分詞 という形で受け身文を作れるのですが、母語話者はこのタイプの受け身文をほとんど作りません。その代りに第三の受け身文パターンである se + 三人称の動詞をよく使います。

El campus se trasladó a Ito.

キャンパスは伊都に移転させられた。

この文の trasladar は他動詞で「移転させる」という動作を表します。しかしながら、この文では se がついているので受動文化しているわけです。再帰の se には文を受動化する機能がある、ともいえるでしょう。ちなみにこの受け身の se は主語が三人称かつ無生物の時のみ使用可能です。ちなみに、この受け身の se と先の一般論の se は区別不可能なケースがままあります。伊都キャンパスの例はまあ、固有名詞の話なので受け身なんだろうなと判断できますが。多くの人間の言語において、受け身と一般論の表し方というのは往々にして被ります。どちらの表現も主語がなくても成立するという特徴があるので、そうなるのかなと個人的には思っています。例えば、日本語でも文脈がないと受け身と一般論が区別不可能ということはよくおこります。

博多ではごぼてんうどんが食べられる。

上の文は「ごぼてんうどんが（人々によって）食べられる」という受け身として取ることもできるし、「(一般的に言って) 博多ではごぼてんうどんを食べることが可能である」という一般論風解釈も可能です。

疲れたので省略しますが、英語においても受け身と一般論が類似しているという現象が起こります。この二点が別物ではなく、まあまあ浅いところで繋がっているということを実感できるとこの辺りの se の運用も変わってくると思います。気長に頑張ってください。

訳しましょう

その家々は 2018 年に建設された。

Let's 識別

En España se producen muchos embutidos.

En Salamanca se come muchos embutidos.

Si no trabaja, no se come.

El tifón se acercó a Japón.

Se dice que en Ito no hay nada.

Juana y José se besaron.

Se bebió tres botellas de vino.

Si ella se va, él se va a morir.

Hice muy buenas fotos. Se las voy a enseñar a ellos.

Mi hijo puede lavarse las manos.

Solo se vive una vez.